

両方の結果に共通している。また、テンスについても第二段階で述語が動詞に限定されるようになると、ほとんどすべて過去形になってしまうことも同様である。

動詞の選択に関して寺村論文には、第二段階で「その先生は私に」の後に現れる動詞に、ことばによる伝達を表す動詞が多く、授受動詞がそれに次ぐこと、また、第三段階で「国へ」の後に続く動詞として「帰る」が圧倒的に多く(約80%)使われ、かつ「国へ帰るように言った」というようにして第二段階で予測された伝達動詞を先送りにしていることが述べられている。この結果も今回の調査と共通している。

以上のことから、2つの調査の結果は極めて類似しており、日本語の母語話者のたてる予測には一定のパターンがあることがわかる。そしてこの予測を可能にしているのは、語彙的知識とともに文法的知識が大きな役割を果たしているということが言えよう。

引用文献

寺村秀夫(1987)「聴き取りにおける予測能力と文法的知識」『日本語学』Vol. 6, No. 3, 56-68

参考文献

谷口すみ子(1991)「思考過程を出し合う読解授業：学習者ストラテジーの観察」『日本語教育』71号, 37-50

谷口すみ子(1992)「日本語学習者の読解過程分析」The Language Teacher Vol. 16, No. 5, 31-33

土岐哲, 関正昭, 平高史也, 新内康子, 鶴尾能子(1995)『日本語中級 J301』スリーエーネットワーク

平高史也(1992)「読書行動から考えるシラバス：学部留学生に対して」The Language Teacher Vol. 16, No. 8, 21-23

ある一定の行動が現れている。日本人なら自然に連想するような行動だが、他の文化圏の人にも当てはまるかどうかは疑問である。

5.2 寺村(1987)と今回の調査との比較

今回の調査では、被験者はかなり正確に文の先を予測し、かつ予測のタイプが類似していることがわかった。この結果を寺村(1987)と比較し、異なる被験者グループにおいても同様の結果が得られるかどうかを確認してみたい。寺村論文にデータのあげられている段階1から4までについて、①述語の形態的特徴 ②文末のテンスに関して結果を比べると次のようになる。

表6

(1) 今回の調査(1995) 被験者29人(大学生)

		1 その先生は	2 その先生は私に	3 その先生は私に国へ	4 その先生は私に国へ帰ったら
述語の種類	名詞+だ	12	0	0	0
	形容詞 形容動詞	3	0	0	0
	動詞	14	29	29	29
テンス	現在	11	1	0	0
	過去	18	28	29	29

(2) 寺村(1987) 被験者43人(大学生)

		1 その先生は	2 その先生は私に	3 その先生は私に国へ	4 その先生は私に国へ帰ったら
述語の種類	名詞+だ	9	0	0	0
	形容詞 形容動詞	8	0	0	0
	動詞	26	43	43	43
テンス	現在	26	2	0	0
	過去	17	41	43	43

注) 寺村論文の被験者は大学学部生で、留学生、帰国生は含まれていない。

2つの調査の結果を比べると、類似している点が多いことに気が付く。まず第一段階ではいろいろな種類の述語が見られ、「その先生」に関する特徴づけを行っているが、第二段階以降になると、すべて動詞になってしまうことが

り、「(先生)が帰る」場合は、動詞の基本形または希望の助動詞「たい」を伴った形が使われている。また「(先生と私が一緒に)帰る」場合は、「帰ろう」「行かないか」という勧誘を表す形になっている。

- 段階 (4)
- | | | |
|---|--------------------------|----|
| a | (先生が) 国へ帰ったら (先生が) 何かをする | 7 |
| b | (先生が) 国へ帰ったら (私が) 何かをする | 2 |
| c | (私が) 国へ帰ったら (先生が) 何かをする | 1 |
| d | (私が) 国へ帰ったら (私が) 何かをする | 19 |

d が 2/3 を占めているが、それ以外の解釈も 10 例ある。段階 (3) で「(私)が帰る」と考えた人は、引き続き d の立場を取っているが、「(先生)が帰る」と考えた人は a の立場を取っており、予測が変更されていないことがわかる。

以上が第 4 段階までの結果の分析である。第 4 段階までを詳述したのは、次の考察の章において、今回の調査結果を寺村 (1987) と比較するためである。

5. 考 察

5.1 予測のために必要な言語的知識

以上の結果から、母語話者はかなりの正確さと一致度を持って、文の先を予測していることがわかった。文の予測のためには次のような言語的知識が働いていると考えられる。

① 補語の組合せから述語を予測する文法的知識

例: 「その先生は私に」から「名詞 1(N1) が N2 に」という補語の組合せを取る述語を予測する。

② 名詞の意味特性から述語として現れる動詞の範囲を限定する意味的知識

例: 「N1 が N2 に」という 2 つの格を取る動詞はたくさんあるが、N1 と N2 が両方とも人という意味特性を持っていること、および「先生」という動作主はどんな行為をするのが一般的かという情報が加味されて、動詞が限定される。また「先生」と「私」の力関係から、「先生が私に～するよ」という指示、命令の形が予測される。

③ 明示されていない補文の主語を補う文法的知識

例: 「その先生は私に国へ帰ったら～」の段階で、国へ帰るのは「先生」と「私」の両方の可能性があるが、どちらか一義的に解釈している。

以上の他に、言語外の知識も働いている。

④ 社会文化的知識

例: 「国へ帰ったら」の後に続く部分には、「親孝行する」、「家業を継ぐ」など

補助動詞としての「～てくれる」は7例ある。

段階(3)における「その先生は私に国へ」の後に続く動詞にも、はっきりした偏りが見られる。

表5 段階(3)「国へ」に続く動詞の種類

帰る	24
戻る	2
帰郷する	1
行く	1
いる	1

表5を見ると、「帰る」に相当する動詞以外は、ほとんど使われていないことがわかる。この段階(3)での文末を見ると、段階(2)で予測された「言う」に相当する動詞が依然として使われており、「その先生は私に国へ帰るように言った」というような構文が17例を占めている。つまり「(私が) 国へ帰る」という叙述内容を、動詞「帰る」を命令形に類する形にして、「言う」と結び付けているわけである。ただし、同じ「帰る」という動詞を使っても命令形を使わずに、「(先生が) 国へ帰ると言った」という話し手の意志を表す文や、「(先生と私が) 一緒に帰ろうと言った」という勧誘を表す文も少数見られた。(4.5を参照のこと)

段階(4)で「その先生は私に国へ帰ったら」の後続部を見ると、「(誰かが) 何かをする」という動詞が来て、それが「～ようにと言った」という文末と結び付くという予測が19例あり、文末には相変わらず「言う」に相当する動詞が使われていることがわかる。(例: その先生は私に国へ帰ったら連絡するようにと言った)

4.5 統語構造

段階(3)(4)において「国へ帰る」のは誰か、段階(4)において「何かをする」のは誰かを被験者に指摘してもらったところ、次のような結果を得た。

段階(3) a (先生が)	国へ帰る	8
b (私が)	国へ帰る	18
c (先生と私が一緒に)	国へ帰る	2
d その他		1

「(私が) 帰る」場合は、「帰る」という動詞が命令や指示を表す形になってお

4.3 表現内容

予測文の表現内容を見てみると、段階(1)と(2)の違いがよくわかる。表現内容の分類については、寺村1987を参考にして、次のようにした。

- A ある対象の特徴づけ，性情描写
- B 出来事，生きものの動作，行為

表3 表現内容

	A 特徴づけ，性情描写	B 出来事，動作，行為
段階(1)	23	6
(2)	0	29
(3)	0	29
(4)	0	29

(1)の段階では「その先生」がどんな先生かについてなんらかの特徴づけを行っている文が大半である。Bのタイプの文でも、繰り返し、習慣的な動作や行為を表すものが多い。(例：英語を教えています。)ところが(2)になると、「その先生は私に+動詞」という構文に一本化され、その動詞も一回きりの動作を表すものがほとんどとなる。

4.4 動詞の種類

段階(2)，つまり「その先生は私に」の後続部に現れる動詞には、ある一定の傾向が見られる。動詞の種類と使用頻度を次にあげる。

表4 段階(2)の動詞の種類

<ことばによる伝達を表す動詞>		<授受動詞>		<その他>	
言う	7	くれる	1	接する	1
話す	3			かわいがる	1
教える	5			もちかける	1
怒る	3			出す	2
注意する	1				
質問する	1				
提案する	1				
頼む	1				
(話を)する	1				

「言う」を代表とする「ことばによる伝達を表す動詞」が圧倒的に多く、23例(約80%)にのぼる。本動詞としての授受動詞は「くれる」1例だけであるが、

もう二度と戻らないと言った
両親に会えることを教えてくださいました

以上、被験者の書いた第一から第四文節までの後に続く文の予測を列挙した。次にこれらのデータの形態的、表現内容的、意味的、統語的分析を行う。

4.2 形態的特徴

まず文を述語の形態的特徴によって分類すると次のようになる。

表1 述語の形態的分類

	名詞+ダ	形容動詞+ダ	形容詞	動詞
段階(1)	12	1	2	14
(2)	0	0	0	29
(3)	0	0	0	29
(4)	0	0	0	29

(1) の段階では、名詞や形容動詞に「ダ」のついた形や、形容詞や動詞といったいろいろな種類のものが述語になっているが、(2) の段階以降ではすべて動詞になっている。

次に、文末のテンスに注目し、「～ダ」、形容詞、動詞の終止形を「基本形」、いわゆる過去の助動詞のついた「～タ」という形を「過去形」と呼んで、分類してみると次のようになる。(このテンスの名称は寺村 1987 に従った。)

表2 文末のテンス

	基本形		過去形		
段階(1)	11	名詞+ダ	4	18 名詞+ダッタ	8
		形容動詞+ダ	0	形容詞動詞+ダッタ	1
		形容詞	1	形容詞	1
		動詞	6	動詞	8
(2)	1	動詞	1	28 動詞	
(3)	0			29 動詞	
(4)	0			29 動詞	

(1) の段階では基本形と過去形の両方が使われているが、(2) の段階で述語が動詞に限定されるようになると、それ以降は1例を除いてすべて過去形になっている。

69 (44) 読解過程における予測の働き

大切な人がいるから帰郷すると言った
帰りたいんだとよくぼやいていた
帰るお金がほしいと言った
自分の両親がいることを話してくれました

(4) その先生は私に国へ帰ったら

ご両親によろしくとおっしゃった
両親によろしくと言っていた
お父さんによろしくと言った
お母さんによろしくと言っていた
たまには親孝行したらと言った
親孝行をしてやりなさいと言った
お土産を買ってきてほしいと言った
連絡するようにと言った
父母をいたわりなさいと言った
電話をするようにと言われた
すぐ電話しなさいと言った
母親を探しなさいと言った
連絡ぐらいしてくれと言った
手紙を出すように言った
手紙を一通書くようにと言った
手紙をちょうだいねと言った
手紙をくれと言った
親を大切にしろと怒りました
地酒を送ってくれと言いました
郷土料理が食べたいと言った
遊びにおいでといった
手紙を書くと言った
私は TEL をくれるように言った
親に会うと言った
家業を継ぐことになると言った
自家の家業を継ぐと言った
子供の顔が見たいと話した

しゃべるなど注意した
 課題を出しました
 とても難しい課題を出しました
 中学受験ということで相談しようともちかけられ
 ました
 私にがんばれとはげましの言葉をくれた
 提案しました
 いきなり質問した
 対して特別かわいがってくれた
 いつもよく接してくれた
 用事を頼んだ

(3) その先生は私に国へ

動詞文 帰るようにおっしゃった
 帰るように言った
 帰った方がいいんじゃないと言った
 帰れと言いました
 帰れと言った (2人)
 帰るということを突然告げた
 帰ってみてはどうかと言った
 帰った方がよいと言った (2人)
 一緒に帰ろうと言われた
 帰ってみなさいと言った
 帰りなさいと言った
 帰るなど言った
 帰るように説得し始めた
 一緒に行かないかと言った
 帰るように薦めた
 少しは帰ってやれと言った
 一回帰った方が良いのではと忠告した
 もどれと怒りました
 帰るのかと聞きました
 帰ると言った (3人)
 戻ろうかと言った

71 (42) 読解過程における予測の働き

とてもきびしい
動詞文 私のことをよくわかってくれました
うるさいので怒りました
機嫌がわるかったので怒りました
おこりました
とてもいねいに教えてくれる
英語を教えています
私達に国語を教えている
結婚している
たいへんおもしろい授業をする
授業がとてもつまらないのでみんな寝てしまう
いきなり怒鳴った
教室に入ってくるといきなり話し始めた
面白く、生徒にとっても人気があった
今年4月からこの学校にきた

(2) その先生は私に

動詞文 言いました
言った
静かにしろと言った
授業に参加しないと単位を出さないとやった
プリントを配るように言った
「授業がつまらないからといって寝るな」と言った
何か言おうとしていた
中学の頃の事を話し始めた
話しかけてきた (2人)
よく学生時代の話をしてくれた
いつも生きることとは何かを教えてくれた
勉強以外のことも沢山教えてくれました
教えてくれた
国語を教えている
英語を教えてくれた
うるさいと怒りました
怒りました (2人)

「その先生は」の後に「私に」を続けて書き（「その先生は私に」となる），先ほどと同じようにこの後にどんなことばが続くか考えて文を完成させ，一回目に書いた文の下に，新しい文を書く。以下，同じ手順で，全部で13回，文の後続部の予測を行い，全部書き終わったら紙を回収した。所要時間は約60分であった。以上の手順を図示すると次のようになる。

- | 板書の部分 | 被験者による文完成 |
|--------------------|-----------|
| 1. その先生は……………。 | |
| 2. その先生は私に……………。 | |
| 3. その先生は私に国へ……………。 | |
| (以下略) | |

4. 結 果

ここではまず，第1から第4段階までにどんな文が現れたかを1995年のデータをもとに具体例をあげ，次にいくつかの視点から分析を行う。

4.1 予測文のデータ

文の予測（1995年度 解答者29人）

(1) その先生は

- | | |
|-------|-----------------------|
| 名詞文 | 女の先生です |
| | 若くて背の高い男の先生です |
| | 中学校の先生でした |
| | 小学校の先生で皆から好かれている先生でした |
| | 中国語の先生です |
| | 女性です |
| | 若い美しい女の先生だった |
| | とても優しい人だった |
| | 笑顔を見せないが，気のやさしい人だった |
| | 私が中学生の時の担任だった |
| | 出身地が岡山だった |
| | 昔は体育の先生だった |
| 形容動詞文 | カメンライダーが好きだった |
| 形容詞文 | とても優しかった |

73 (40) 読解過程における予測の働き

このような予測をたてるのに必要なのは次の3種類の知識である。

- ①言語的知識（文法，語彙，文字表記など）
- ②文脈に関する知識（場面設定に関する知識，文章の展開に関する知識）
- ③スキーマ的知識（背景知識）

また知識を効果的に使うための技能，およびストラテジーも読解には必要とされている。

3. 調査方法

本稿は，予測に必要な知識のうち，特に言語的知識を母語話者がどのように使っているかを調査することを目的としている。調査方法は，文章ではなく文を調査の単位とし，文節ごとに区切って被験者に提示して，後続部分を予測させるというものである。この調査は，寺村秀夫「聴き取りにおける予測能力と文法的知識」（1987）と同様の実験方法を用いて，異なる被験者グループにおいても，同じ様な結果が得られるかどうか確かめるために行った。

3.1 調査の対象者

首都圏近郊在住の女子短期大学生を対象に，同じ調査を1994年と1995年の2回にわたり行った。1994年と1995年とでは，被験者は異なっている。年齢は18-19歳で，本学の日本語日本文化学科に在籍しており，出身地は首都圏近郊（神奈川県，東京都）がほとんどである。対象者の中には留学生や帰国生は含まれていない。調査人数は，1994年が46人，1995年が29人である。本稿では1995年の調査について詳しく述べることにする。

3.2 データの収集方法

調査者が作ったのではない，比較的長い文を，分節毎に区切って黒板に書き，その後どんなことばが続くかを被験者に考えさせて，紙に書いてもらうという方法をとった。

使用した文は，夏目漱石の「こころ」の中に出て来る次の文である。（斜線は句切りを示す。）

その先生は / 私に / 国へ / 帰ったら / 父の / 生きている / うちに / 早く / 財産を / 分けて / 貰えと / 勧める / 人 / であった。

まず第一段階として，黒板に「その先生は」と横書きで板書し，被験者に文の後続部分を考えて文を完成するようにと指示し，紙に書いてもらう。次に，

読解過程における予測の働き

谷 口 すみ子

1. はじめに

母語および外国語での読解過程については、これまでに多くの研究が行われてきている。

本稿は日本語の母語話者が日本語で書かれた文章を読む時、どのような予測をたてながら読んでいるのか、また予測をたてるためにはどのような知識を使っているのかを調べることを目的としている。

2. 文章読解における予測の働き

読者は文章を読んでいる時に、現在目で追っている文字の連鎖の解読だけを行っているのではなく、その先に書かれている内容を予測しながら読んでいる。我々は文章を読む時、何を手がかりに予測をたてているのだろうか。例えば書店で本を一冊手にとった時、我々はその本の内容について次のような手がかりから予測をたてるだろう。

- ①本の題
- ②著者
- ③本の表紙の絵や写真，デザイン
- ④本にかかっている帯に書かれた文章
- ⑤目次
- ⑥あとがき

さらに、実際の文章を読む時には、次のような手がかりをもとに予測を行っている。

- ⑦キーワード
- ⑧文脈
- ⑨文章構成
- ⑩文法規則
- ⑪単語の意味，語構成，共起関係